

『蝦夷日記』に見る北辺警備

～日露関係史序説～

中 村 玄 二 郎

序

嘉永5年（1854年）夏、ペリー率いるアメリカ東インド艦隊の4隻の黒船の来航によって、泰平の眠りから目覚めさせられた我が国は、この時から、所謂幕末15年の激動期へと突入していくことになる。15年後明治維新によって、日本の近代化が始まったのであるが、外国船が正式に交易を求めて我が国にやってきたのは、ペリー来航に先立つこと60余年前の寛政4年（1792年）のことであった。

ロシア皇帝エカテリーナ2世の使節アダム・ラックスマンは、1792年10月、北海道の東端根室に、漂流民3人（大黒屋光太夫・磯吉・小市）を伴って来航した。この地で越冬して翌年、道南の松前に到り、江戸より派遣された幕府の使者（宣諭使石川将監・村上大学）と日露初の会談を行なった。この時は、祖法を盾に通商を拒否し、正式の交渉は外国への唯一の門戸である長崎で行なう旨伝えて、長崎への入港許可証（信牌）を交付し、漂流民を受け取った後、ラックスマンらを帰国させた。この時の幕府側の曖昧な対応は、ロシア側に対して長崎に行けば通商交渉は容易であるとの心象を与えたようで、この後、日露間に諸々の紛争を引き起こすことになる。

関係者の死（ロシア皇帝や仲介者であるラックスマンの父）などがあって、一時ロシア側の日本への働きかけは途絶えたが、文化2年（1805年）、再びロシア皇帝（アレクサンドル1世）の使節であるレザノフは、ラックスマンに交付された信牌を携えて長崎へ来航した。この時の幕府の対応は、ロシアの期待を大きく裏切ったばかりでなく、むしろ西洋諸国の常識から見れば、不誠実と看做されても仕方のないものであったようだ。長崎来航以来半年も軟禁同様の状態で待たされた挙句、通商を拒否されて、しかも信牌も取り上げられて追い返されたロシア使節レザノフの憤懣はやるかたないものがあった。このことが原因となって、武力を背景にして日本に対して通商を迫るというレザノフ個人の信念から、文化3年・4年の露寇事件（注1）が引き起こされることになる。本稿はこの事件を中心に、明治以前の日露関係と北辺警備の実態を検討しようとするものである。

＊

この事件を中心とした、当時の蝦夷地の状況をリアルに伝える史料として、津軽藩士山崎半蔵が残したとされる大部の日記と紀行文（注2）がある。これらの日記類は、当時の北方警備の実情を伝えるばかりでなく、蝦夷地と呼ばれた北海道の姿を詳細に伝える貴重な史料でもある。北海道の各市町村史の多くが山崎半蔵の残した日記・紀行文からの引用を載せていることから、その重要性は伺える。

そこで本稿は、まず第一編として寛政から嘉永の時代を生きたとされる、山崎半蔵とその著書について検討してみることとする。山崎半蔵という人物の考察から始める理由は、この著者をめぐって幾つかの大きな疑問点があり、彼の実在性が明確にならなければ、彼の著書についてもその信憑性が問題となるからである。

まず、山崎半蔵に関するいくつかの記述を紹介することにする。

(1)『国書人名辞典』(岩波書店)

山崎半蔵(やまざきはんぞう) 藩士 [生没] 生年未詳、嘉永四年(1851)没。90余歳以上。〔名号〕名、久顕。通称、半蔵。号、本立・万里堂。〔家系〕山崎立朴の次男。兄、陸奥弘前藩表医者清朴。〔経歴〕弘前藩士。幼より経学・算術に秀れ、寛政(1789~1801)年中、算術指南として弘前藩に出仕。のち勘定人加勢となる。剣・棒・柔術の指南役をも勤め、幕命による蝦夷地警備に派遣され取締りに当たった。

〔著書〕蝦夷日記(文化元年~五) 宗谷詰合山崎半蔵日誌 東蝦夷紀行 松前下蝦夷地紀行(文化三)
〔参考〕青森県人名大事典

この辞典は、父親についても載せているので、それも引用しておこう。

山崎立朴(やまざきりゅうぼく) 医者 [生没] 延享四年(1747)生、文化二年(1805)没。五十九歳。〔名号〕名、顕甫。号、立朴。〔家系〕北畠具統の後裔。子、陸奥弘前藩表医者清朴・半蔵。〔経歴〕陸奥津軽郡館越村の医家。先祖北畠氏一族(注3)の家記を改編し、世に『館越日記』(永禄日記)と称された。医術にも秀れ、寛政六年(1794)弘前藩校稽古館創設の際、藩主津軽寧親の要請により蔵書数千巻を献納し、「山崎立朴文庫」とした。

〔著書〕永禄日記編

〔参考〕青森県人名大事典

次に、〔参考〕にあった『青森県人名大事典』を見てみよう。

(2)『青森県人名大事典』

山崎半蔵(一はんぞう) 嘉永四年(1841)没。久顕。本立、万里堂と号す。津軽館越の医師山崎立朴の二子、清朴の弟。幼年の頃から聡明で経学算術に優れ寛政年中、算術指南として津軽藩に召抱えられた勘定人加勢となって上方へ行く。武士となって武術を知らないのを恥とし剣、棒、柔術を勉強して妙を極め、ついに師範役となった。当時、蝦夷地警備に行っても逃げて帰る藩士が少なくなかったのも、藩主は憤慨して竹森又吉とともに半蔵を蝦夷地へ派遣して取り締まりに当らせた。長子、三子に先立たれ、90余歳の時、富山某の子を内弟子としたが、この子は14.5才のころ人々に牛若丸といわれ、半蔵の死後、門弟多数を教育した。(陸奥史談 弘前寺院縁起志 津軽古今偉業記)

同『大事典』は、半蔵の父親と兄についても載せているのでそちらも引用しておこう。

山崎立朴

「山崎顕甫ともいう。柏木組、館越村(北津軽郡沿川村一現板柳村)の医家。家記を編集して『館越日記』という。大永元年(1521)~安永7年(1778)の記録である。これはもと佐藤只之助家記『永禄日記』である。佐藤家の先祖は浪岡御所北畠氏の一族で日記役であった。それ以来文化年代(1804~)まで書き継がれ、世人は『館の越記』(又は『梅田日記』とも)といった。なお、『津島記』(津島正長家記で『津軽大宝記』という)と『館の越記』は、その時代、その人の耳目に触れたものを、そのまま記した実録で貴重な資料とされる。こまかな点では『海濱記』(長崎家記)『暦世録』(木立家記)の二書に劣るが、民間の事情に詳しい事は他記に見られない。立朴はさらに改編して、1巻より12巻までとし、天明初年に初めて好学の士に示したという。また立朴は医術にもすぐれ、毎日の患者は100人を

越したという。力も強く、300斤（48貫＝1,800キロ）を動かし、人に負けたことがなかった。寛政年中稽古館の創立にあたり、津軽永孚の請により数千巻の書を藩に献納して「山崎立朴文庫」といわれた。文化2年（1805）没。なお山崎の先祖は北畠顕家で、世々浪岡城にいたが、津軽家の嫌忌を避けて、山崎と改姓していた。明治15年、一族25人とともに北畠の復姓を願い出てその許可を得た。23代徳本（顕靖－医師・薬剤師・県会議員）の時代であった。（北畠栄太郎－顕就『北畠家文書』一木萩、封内事蹟秘苑）」

次に、兄清朴についての記述を見てみよう。

山崎清朴

「天明8～文化12（1788～1815）医師。津軽9代寧親の寛政8年（1796）学校医道御用懸、同10年医学本科添学頭、文化5年（1808）表医者格並合御番、同10年表医者になったが文化12年没。清朴は【浪岡御所】北畠具統の遠孫といわれる旧家で、『永禄日記 館越日記』を書いた立朴（1747～1805）は、その実父である。なお、明治15年（1882）旧姓北畠に復姓した。」（『津軽史』104）

なお、昭和31年に発行された、みちのく双書第1集『永禄日記』の解題（刊行委員成田彦栄）によると、「永禄日記は山崎氏の家記であり、山崎氏が代々家憲として書き続けてきたものと伝えられる。日記の編者は、長左衛門（山崎）の息山崎立朴である。立朴の長男清朴が東京本第四巻の見返に〈永禄日記は吾先祖累世の家乗也 式百年を経て文字損傷多し 先人立朴中年之節自身清書被致候ハ宝暦十三癸未年迄也〉と明記している如く、立朴が伝襲の家記を整理して一書としたのである。・・・・・・・・東京本（注4）は宝暦以後、清朴によって書き続けられ、天保7年に終わっている。・・・・・・・・」

この、成田氏による文章中下線を施した部分は、後に見るように大いに問題を含んでいるが、ここではそれを指摘するだけに留めておくことにする。

以上、引用が長くなったが、これらの記述を比べてみると奇妙なことに気づく、というよも大きな疑問が起こってくる。この三人の家族に関する年齢関係を時系列で並べてみると次のようになる。

1747年（延享4年）山崎立朴（父）生れる。（1805年没59歳）

1788年（天明8年）清朴（兄）生れる。（1815年没27歳）

? 年（ ?? ）半蔵 生れる。（1841年没90余歳）

1805年（文化2年）立朴没（59歳）

1808年（文化5年）半蔵と清朴蝦夷地で行き会う。（『宗谷詰合山崎半蔵日誌』に記載あり）

1815年（文化12年）清朴没（27歳）

1841年（嘉永4年）半蔵没（90余歳）あるいは（79歳）

一応人名辞典類の記述をそのまま受け入れて3人の年齢関係を整理すると次のようになる。

父立朴は1805年（文化2年）に58歳くらいで亡くなっている。父立朴が亡くなったとき兄清朴は17歳くらいということになる。この清朴は27歳頃に早死にしたようである。

一方半蔵についてみると、生れた年については全く記述がないことから、生まれた年については、記述の年齢と没年から推定する他ない。90余歳の頃内弟子をとり1841年（嘉永4年）に亡くなったということからすると、亡くなった年齢を仮に90歳だとすると、生れた年は1751年かあるいはその数年前ということになる。しかし、もしそうだとすると、半蔵は立朴4.5歳頃の子供ということになり、これは到底あり得ない。

さらにおかしなことは、もし半蔵が90歳近くまで生きていたとすると、半蔵は兄清朴より37.8年も早く生れていなければならないことになる。人名辞典類からどうしてこのような矛盾が生じてくるのであろうか。ここでは、簡略化するために人名辞典類の資料を二つしかあげなかったが、他の辞典類にも若干の記述があるが事情は同様である。考えられることは、これら人名辞典類がよりどころとした原資料が共通しており、原資料の記述に誤りがあるということが予想される。原資料と思われるものとして、『陸奥史談』や『津軽藩古今偉業記』があげられるが、これらの記述は先の辞典類の記述をもう少し詳細にしたもので、矛盾の出所であることを証明するに過ぎないので、ここでは敢えて取り上げず視点を変えて考えてみたい。

＊

『弘前寺院縁起志』（注5）の赤倉山寶泉院の項に山崎半蔵について次のような記述がある。

「武術家 山崎半蔵久顕 資質剛毅にして武芸を励み、當田流の劍術家にして、槍 術柔術にも達し、門人を教導し老いて衰えず、嘉永4年11月12日歿す、行年七十九、門人碑を建つ。」

これによると、半蔵の没年は嘉永4年と変わらないが、没年は79歳と少し早くなる。しかし、79歳で亡くなっているとしても、それでも半蔵が生まれたのは1762年頃となり、父立朴15歳頃の時の子ということになるし、兄清朴より26年くらいも早く生まれたことになる。しかし、後述するように兄清朴と半蔵の関係は日記の記述から見て極自然な兄弟関係を想像させるので、何故このような食い違いが生じたのかは理解しがたい。

ここでちょっと飛躍して想像を逞しくすれば、もし父親の立朴が嘉永4年まで生きていたとすると、1747年生まれであるから、94歳位まで生きていたことになる。とすると『青森県人名大事典』の「長子、三子に先立たれ、90余歳のとき、富山某の子を内弟子として・・・」という記述は父親立朴のことと混同されている可能性がありはしないだろうか。長子（清朴）、三子（??）に先立たれ二子（半蔵）のみが生存していたとすれば、一応辻褄は合うことになる。）しかし前述したように、半蔵が嘉永4年（1841年）79歳で死亡とすれば、清朴死亡時の文化12年（1815年）に半蔵の年齢は53歳ということになり、清朴没27歳と明らかに矛盾する。

そこで、ちょっと視点を変えて半蔵の蝦夷行きの年齢という点からもう一度見てみたい。

半蔵の第一回目の蝦夷行きは、享和年のことと思われる。少なくとも、はっきりしている年は、文化元年と2年（『蝦夷紀行』は文化2年乙巳4月初旬から書き始めている。）、そして文化4年から5年（『宗谷詰合山崎半蔵日誌』には文化元年と4年から5年にかけての越冬の記録が載っている。）にかけての3回は日記の上から確認できる。

この内の『宗谷詰合山崎半蔵日誌』は、市立函館図書館所蔵によれば「巻3、4、5」と「巻6、7、8」の2部に分かれている。両者はいずれも写本であるが、取り敢えずこの写本の記述を事実と仮定して考察を進めて行くことにする。

『宗谷詰合日誌』（以下山崎半蔵は省略する）は、ロシアに対する津軽藩の北方警備に関する日記であるが、特に「巻6、7、8」は文化3年4年の露寇事件の際の記録である。文化4年、山崎半蔵は蝦夷地から弘前に帰国して休む間もなく、一年遅れで報せがもたらされた文化3年のロシア人による樺太侵涼事件に対する応援部隊として再び蝦夷地に渡ることになる。このときは、悪天候のため半蔵の乗船が箱館沖で遭難し、数人の死者を出した上、積荷の多くを失ってしまう不運に見舞われるが、辛くも箱館付近の札刈（サツカリ）の海岸にたどり着くことが出来た。

箱館で事故の処理などを行った後、半蔵は部隊50人を率いて陸路宗谷救援に向かうことになる。道中、エトロフ島における新たなロシア船による掠奪事件の第一報を報じる使者、医師久保田見達とすれ違った様子をはじめ、異様なまでに高まっていた蝦夷地の緊張感を、日記は生々しく伝えている。

宗谷で越冬警備に就き、文化5年夏、多くの病死者を出した後、やっと半蔵等津軽藩の部隊に帰国命令が出た。巻8は帰国の道中の様子が記されているが、最後の方に本稿にとって重要な記述がある。それは、兄清朴について触れている部分である。

- 「一、 同十二日松前ノ医者櫻井小膳御人数療治トシテ来ル由……………○松田傳十郎調役下役元締被仰付候條口達アリ ○同人カラフト行ノ筈 ○小川喜太郎着ノ事 ○森岡金吾殿三月六日松前着被成候旨 ○兄山崎清朴同日松前着ノ上知セアリ
- 一、 四月十三日晴松田傳十郎カラフトへ出帆
四月廿二日ソウヤ出立ノツシャ泊リ」
- 「 五月十五日晴モロランヘノ途中チリベツ休所ニテ金吾殿ニ御行逢ノ処……………○兄清朴同所詰被命御同伴致来リ対面喜悲話度事多シト雖モ随従人多シ俱ニ無事ヲ述テ別レシノミ残情多カリシ」

半蔵は文化5年、宗谷詰警備が終わって帰国の途中5月頃室蘭辺りで、兄の清朴に出会っている。ゆっくり積もる話も出来なかったようであるが、この記述を読む限りでは、一緒に育った普通の兄弟の間柄であったことは、「残情多カリシ」という言葉からも推察される。しかしながら、半蔵の年齢を考える上ではこの記述は、大きな問題を投げかけることになる。清朴は文化12年、27歳の若さで世を去っていることになっている。もし、この記述が正しいとすれば、清朴は文化5年には20歳くらいということになる。すると、弟の半蔵は、年子であったとしても20歳に満たないことになる。早熟であった当時のことを考えると絶対にあり得ないとは言えないかも知れない。しかしそうすると、半蔵は寛政12年頃に最初に蝦夷に渡っているようであるから、14,5歳で渡った事になり、これはちょっと無理がある。すると、どういうことになるのだろうか？

先にあげたように、半蔵と父立朴に関する記述が、理由は分からないが入り混じっているのではないかということが、可能性としては考えられる。それから、半蔵と立朴と清朴の生年と没年、それに没年齢が本当に正しいかということが改めて問題となるだろう。先にみちのく双書第1集『永禄日記』の解題のところで指摘した下線部分には、「東京本は宝暦以後、清朴によって書き続けられ、天保7年に終わっている」となっている。これが事実だとすると、文化12年以降も清朴は生きていて、『永禄日記』を書き続けたということになる。『永禄日記』の東京本というのは、清朴の子孫である現在東京在住の北畠家に保存されているものだから、これについては偽作といった類の問題は考えづらい。

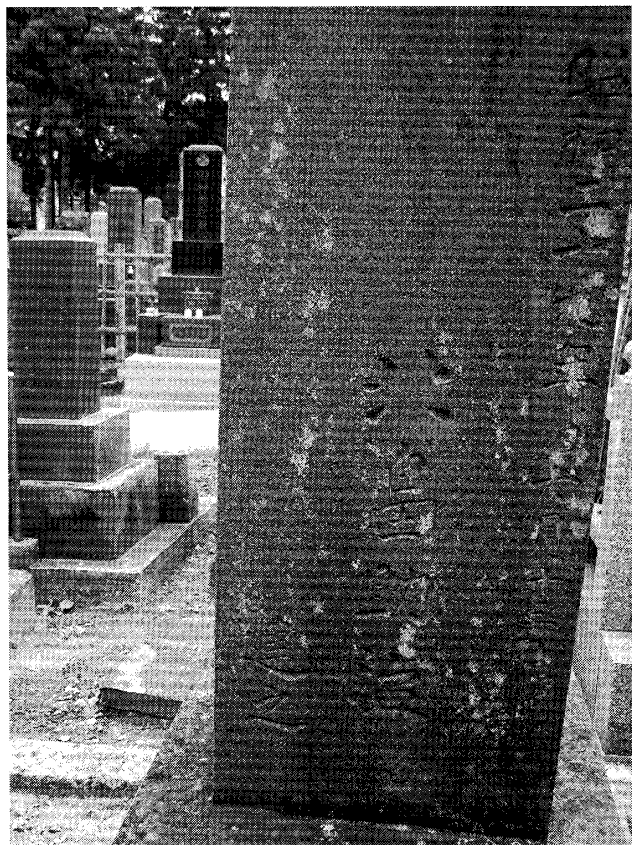
したがって、3人ともその生年・没年は、辞典類の記述を採用することはできないということになる。

＊

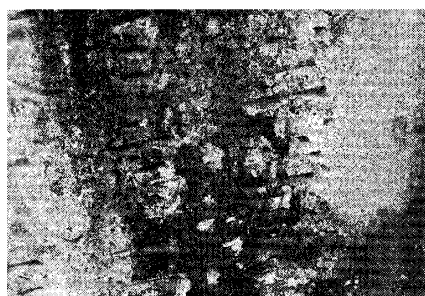
そこで、次により客観的な史料にあたってみることにする。

先にあげた、『弘前寺院縁起志』の半蔵に関する記述に注目して弘前市の寺町にある寶泉寺へ行ってみたところ、実際に寶泉寺の墓地に門人の建てた自然石の碑が建っていた。その碑文に拠れば、確かに嘉永4年79歳で亡くなった、とある。またこの碑のそばには昭和に建てられた北畠家の墓もある。このことからみて、山崎半蔵が北畠氏の末裔で嘉永4年に79歳でなくなったことはほぼ確実なことと考えてよいと思われる。以下、碑に刻まれた碑文をあげておく。

寶泉寺の山崎半蔵の碑



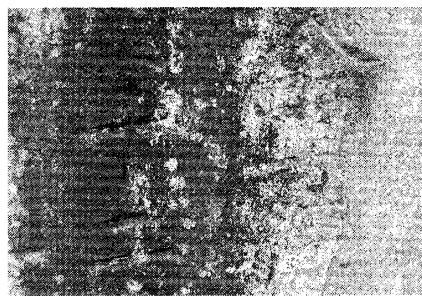
この二基の自然石は、山崎半蔵に関するものであり、更に自然石の間に見える墓石は、北畠家のものである。この三者は同一の墓域にあり、北畠家に関係の深いものであると考えて間違いないだろう。従って、自然石が立てられた頃は、まだこの北畠家は山崎姓を名乗っていたと考えてよいだろう。向って左の墓石は、表に山崎勘一郎の墓とあり、天保年間に建立されたとある。見えている裏面に彫られている文字はカビなどのため判読が難しい。右の自然石には、現在見えている裏面には「山崎門人黒瀧喜左衛門？行・工藤久左衛門隆徳 建立」と彫ってある。



半蔵



諱久



久顕



而歿齡

嘉永



齡七

永四年



銘曰

文徳

十一月



この碑文からは、嘉永4年11月12日病で79歳で亡くなったこと、戒名は（文徳院殿）武（応）本立居士といい、能く刀・槍・柔術に務め、遂には人の師となったことなどが読み取ることが出来る。

この碑文から山崎半蔵が嘉永4年79歳で亡くなったとすると、兄清朴や父立朴との年齢の不整合はどのようなのであろうか。このことを解決する糸口は、もう一つのかかなり信頼できる公文書の性格を持つ津軽藩の日記の中にある。

*

この日記は、津軽藩の公式の日記で、江戸の藩に関する日記と弘前の領内の日記と二つあるうち『御国日記』と呼ばれる弘前のものである。『御国日記』自体は膨大な量であるが、その中から医事関係の部分抜き出した『津軽藩医事文化史料集成－御国日記－』（松木明知・花田要一編 第86回日本医史学会 1994年岩波ブックセンター）によればこれまでの疑問がある程度解けるように思われるので、ここに載っている関係部分を幾つか抜粋してみる。

- ・天明 8年(1789) 12月28日 一、在医館越村山崎立朴儀医術出情療治方宜相聞
へ抜群奇特之者ニ付 御年始御目見被仰付候申渡候様郡奉行へ申遣之

- ・寛政 6年(1794) 7月 4日 一、今日当町奉行并碇ヶ関大間越野内町奉行江相渡候口上書
左之通 先頃山崎立朴倅清朴儀友助と致改名弟半蔵と申者同道二て野内御関
所罷通候節大道寺勇人殿江江戸神田昌平坂聖堂ヨリ自分用事之由ニて罷通候
処右立朴倅と申儀実否相知兼候
間段々御詮議被仰付候処清朴心得違之由申出候

- ・寛政 9年(1797) 正月15日 一、山崎清朴 儀学校御用懸被仰付候
処

- ・寛政10年(1798) 3月 9日 一、 松前御用被仰付罷有候ニ付去年同道仕候山
崎清朴委細見覚罷有候間

- ・文化 5年(1808) 2月 3日 一、 山崎清朴 其方儀当春松前蝦夷地石狩
為御固被差遣之

- ・文化14年(1817) 7月27日 一、町奉行申出候 昨26日之夜元大工町山崎清朴門口ニ捨
子有之

- ・文政 2年(1820) 12月28日 一、於御用所上之間監物申渡之覚
銀五両山崎清朴 以上

- ・文政11年(1829) 11月28日 一、 山崎了泰 其方親清朴儀隠居願之
通

- ・文政13年(1830) 2月 2日 一、山崎了泰申出候 親清朴儀先年拝領被仰付候御召下御袖
為冥加着用願之通被仰付之

- ・天保 5年(1834) 正月27日 一、 館野越村山崎立朴瀬良沢村岡嶋順雪懸合御
施薬被仰付度旨申出候人共

- ・天保 5年(1834) 4月 1日 一、今日御目見被仰付候面々 了泰倅 山崎忠庵

『御国日記』から我々が知ることが出来るのは、まず山崎清朴は文化12年に27歳の若さで死んだ事実はないということである。文政11年に、正式にお抱え医師としての職を息子の了泰にゆずって隠居したのである。更に驚くことは、天保5年の日記に立朴の名前が見えることである。これが父親の立朴だとすると、この時立朴は87歳の高齢ということになるが、立朴の名を継いだ別人だという可能性もある。しかし、立朴という人は特別な体力の人で豪傑であったという言い伝えがあるので全くあり得ない話ではない。

この辺りで、半蔵もまた特別な才能と体力の人であったようなので、両者が時間の経過と共に混同された部分があったのかも知れない。また、清朴の生年についても見直さなければならないだろう。いずれにしても、更に別な客観的な資料に拠らなければ、決定的なことは分らない。しかし、最初に行き当たった矛盾は解消されて、一歩前進したことだけは確かである。従って、山崎半蔵の実在性と、彼の書いたという記録類（日記と紀行文）の信憑性はより高まったということだけは確実にいえるだろう。半蔵の没年から出発して3人の本当の生年・没年を決定することも不可能ではあるまい。（注6）問題が振出に戻ったところで山崎半蔵という人物に関する本稿を閉じて、次稿では半蔵の記録類を基に北方警備の実態を考察してみたい。

注1 文化3年（1806）9月、レザノフの命令を受けたフヴォストフ等が率いるロシア武装船が樺太久春古丹を襲い番人4人を捕らえて連れ去り更に食糧などを奪い、運上屋や倉庫を焼き払った。

更に、翌年春エトロフ島を襲い、北上して再び樺太や利尻島を襲い乱暴を働いた事件。特に、エトロフ島には津軽藩・南部藩の部隊が守備していたが、総崩れとなってしまう、責任者である幕吏戸田又太夫は責任を感じて自害した。

注2 O『宗谷詰合山崎半蔵日誌』（3, 4, 5巻）（6, 7, 8巻） O『毛夷東環記－東蝦夷地紀行－』
O『松前下蝦夷地紀行』（内容は東蝦夷地紀行と同じ） O『万里堂蝦夷日記抜書』天/地
『宗谷詰合山崎半蔵日誌』の方は現在1巻と2巻を欠いている。

注3 浪岡北畠氏の始祖は、鎮守府將軍北畠顯家の子顯成を祖とするとしたり、顯信（顯家の弟）の子を祖とするといった記録がありはっきりしないが、北畠親房の子孫であるということは間違いないようだ。一時は浪岡御所とよばれたが次第に衰運に向い、天正6年大浦為信の反乱によって顯村の時に滅ぼされてしまった。後に為信は津軽氏を名乗り、生き残った北畠氏の子孫は津軽氏を憚って山崎姓を名のって浪岡（館越）周辺にひっそりと暮らしていたという。立朴の代に、蔵書を藩に寄贈した功績で、長男清朴が藩の医師に取り立てられて再び世に出ることになったという。

注4 『永祿日記』の中でも、東京井の頭の北畠家に伝わる本は、清朴によって書き継がれて、天保7まで載っているという。

注5 中村良之進著 昭和8年 陸奥史談会

注6 清朴に関しては、菅江真澄の日記類から交友関係が分かるので、この点から調べるとほぼ実年令をしぼることが出来そうだが、それは次稿に譲る。

（湘南短期大学）